は天下の四大鎮と稱せられたが、今は榮華轉變して蕭條の感がある。之を要するに此等の市場は單に地方市場たるに過ぎざるも、祁州廟會に至りては過去千百年以來、藥業者の注目して重きを置き、旺盛變ずることなき市場たるのみならず、また一個の祭市をなすものである。祁州廟會の旺盛を極むるに至つたのは、全く南關外の藥王廟なる一小廟の存する爲めで、毎年二回春秋兩期に全國各班の集合するを見る。其開市の日は

春　期　自四月十五日至五月十五日

秋　期　自十月十五日至十二月十五日（共に清曆）

の二期にして、此時に至れば狹隘なる祁州城の內外は頗る雜沓を極む。南關外東街は總て全國藥材商人の集合市にして、各棧房は各種の藥材を以て滿たされ、西街は賭博屋窰子を以て空屋なく、上東街買藥材、上西街買窰子なる常用語あり、開市中は全國の人種聚合し、飲食店の如き雲南、貴州、四川、山東等各種の言語を聞くを得。而して此祁州の守り本尊たる藥王廟には毎日毎夜田舍芝居の興業ありて木戸錢を取らず、恰も日本內地の豐年甘酒祭を大にせるものに類し頗る滑稽である。此期間中には近邊幾十里の間は、上廟去了麼の一語が一般會話の挨拶語として用ゐられ、此廟會終るや商人は歸鄉し、賭局は閉店され、城の內外は俄かに寂寥となるのである。

雜　市

以上列記し來りたるもの丶外、猶ほ市場の範圍に包含せらるべきものあり、露店、行棧、外館は卽ちこれに屬するものである。

露店　祭市に於ける露店は一定の建築物を有せず、又寺院廟殿の如く人の參詣遊覽する處に非ずして、普通の道路の兩側に小商人雜居し商品を陳列して賣却するのである。其携ふる所のものは自ら拿獲した魚類か、親ら栽培せる蔬菜の類にして、彼等は早朝其貨物を擔ひ來りて買手の來り購ふを待ち、これらの露店が往來の頻繁なる處に期せずして相聚まり、相互の間に何の規約もなく賣買の習慣もなく、個々獨立せる露店の集合に過ぎない。斯くの如きものは各地到る處其例を見ざるなく、各市街の城門側に於て最も著しきものあり、例へば上海城南、廣東街の朝市、西門外頭の市場の如きものである。また露店中には俗に泥棒市と稱せらるゝ各種の古物市場あり、大市街地に於てはその繁昌せるを見るが、ハルビン、奉天、北京、上海、天津等いづれもこの種の露店の大規模なものがある。

行棧　行棧は元來一の店舗にして、客商を其家に宿泊せしめ、或は其間に處して賣買の媒介をなし、倉庫の賃貸をなし、交通の具等を周旋し、其用錢卽ち手數料によりて利を得るものであるが、或種の行棧に至りては、特種商品の市場と異ならざるものあり、例へば天津に於ける鮮貨棧卽ち果物問屋の如き、

其主なるものである。天津に於ける鮮貨棧は

裕泰豐鮮貨棧　佛租界にあり
慶豐鮮貨棧　佛租界にあり
永吉祥鮮貨棧　佛租界にあり
錦泰鮮貨棧　日本租界にあり

以上の四行棧は共に廣大なる構を有し、各客商は其鄉里に產する柿、梨、栗等の果實を携帶して天津に來り行棧に宿泊し、其貨物は行棧の構內に置く。故に果實の出廻り季節に到れば、其大なる構も果實を以て充滿さる。行棧は自己の名によりて各客商の爲めに其果物を販賣し、遠くは上海迄も積出し、又天津に於ける各果實商へ卸賣をなし、普通人も稍々多量に購買せん爲め其行棧に到る時は、彼等は廉價に販賣するを以て、宛然一の果實市場を形成するのである。

外館　支那邊疆の民にして其鄉土の產物を携帶し、遠く中華の都會に來り貿易をなして歸るものが少くない。而して之を有形的に現はせるを外館とし、外館は北京安定門外約二淸里の處にあり、蒙古人の來り貿易する處の總稱にして、其中に特に外館と稱する處がある。續らすに墻壁を以てし、周圍約一淸里內は一面の空地にして、蒙古人の來るや此內に駱駝を放ち天幕を張りて起臥し、携ふる所の毛貨、皮貨石貨等を以て種々の文明的雜貨類と物々交換をなす。外館の例を定めたるは道光年間にして、蒙古人は毎年十一月の頃より貨物を駱駝に載せ、此處に來り內地人と貿易交換して歸り、物々交換の外亦金錢取引をもなす慣習があるといふ。

重慶の米市

重慶には我國の所謂取引所なるものなく、市場には米市場六箇所（龍王廟、米亭子、府廟、六寶公所、紫宵宮、鎭臺衙門口）、豚市場一箇所（學院街賣猪市）、雜穀市場一箇所（學院街五庫對門）、野菜市場數箇所（太陽溝にあるもの最も盛大なり）等あり、而して最も盛大なるは米市場である。毎朝午前五、六時頃より各近郊の農民、米を擔ぎ來り上記の處に米市を開き、重慶市內の各需要者及び錢舖は此處に集合する。而して米の行市（相場）は、其の日に運搬せられたる高及び需要者の多少に依りて定り、賣手と買手との間に妥協の出來た價は卽ち其の日の米の行市となる。其市場に使用する錢は制錢卽ち一文錢であるが、農民は其の米を賣りて得たる制錢にて重慶市場より品物を買ひて歸るあり、或は銀兩に換錢し歸るあり、一方錢舖は此米市の景況を見、且つ買手が制錢を銀兩に換ゆる割合により相場を建つ、是れ卽ち當日の制錢行市である。而して米市に於ては一斗以下の小賣を爲さないから、需要者は中等以上の市民にして、下等の市民は概して米舖に行きて小買する。又較仗壩と云へる所に百貨市場あり、一枚の

服、一條の帶、一項の帽、一足の靴、一羽の鷄、一疋の猫、その他何物にても賣却せんと欲するものを携へ行きて賣却する所である。下級人民の多くは此の市場に於て需要者を求め、甚しきは其の暗黑の一面に於て男女身體の販賣、卽ち人身賣買も亦此の市場に於てせらると云ふ。但し下婢の賣買は、支那一般の風習のやうである。

此の外地方に於ては到る處に一、三、五等一定の市日あり、その日には附近の住民市場に集合して、日常用品を交換的に販賣又は購買する慣習あり、この市場に行くことを趕市又は趕場と稱し、老幼男女の遊散的に之に赴くもの少からず、一面地方の社交を維持しつゝあるものと見られる。

正定の大市

正定は京漢線上に在り、停車場を距ること三支里、人口二萬、直隸平野の中に在る。貨物集散狀況を見るに、農民多く、正定は附近の中心市場をなし、棉花、穀類、家畜等の集散が多い。而して毎月二と七との日に於て大市を開き、附近の田舍より種々の物產を運來して賣買されて居る。その大市に五種あり、騾馬市、棉花市、豚市、線子市、粮米市、卽ち是れである。又是等の市の群集を目的として西瓜、南瓜等の青物類、柳細工、竹細工、鐵器類、楮製品、粗製陶器等の露店多く出で雜沓を極む。移入貨物は多く京漢鐵道により天津方面より來るのである。しかしながら近來其の繁榮を、石家莊に奪はれつゝある觀がある。

陝西の羊市

陝西省には回々教徒多く彼等は豚肉を食することを忌むを以て、好んで羊肉を食す。殊に牧羊は他の產業に比して多きを以て、一般人民も羊肉を食し、豚肉は價格高貴にして食するもの稀である。羊市と謂つても市面の大部分は羊を賣買するの意にして、時に驢馬、騾馬、馬、豚等の販賣せらるゝことあるは云ふ迄もない。陝西省北部の牧羊地中最も羊市の盛なる所は清澗縣であるが、毎三日一回之を開く。卽ち毎月三日、六日、九日、十三日、十六日、十九日、下旬に於て二十三日、二十六日、二十九日の九日間開かるゝものとし、之を名つけて三天一集、又は三天逢集と稱す。開市場は東街なる城隍廟及び文廟等の境內にして、別に市場專用の場所なく、又何等の設備をも爲さず、毎年十月三日を以て大會を開く。集合羊數はその數多からず、又年により季節によりて大差あるを免れず、春夏は羊の瘠する時期なるを以て肉少なく、脂も亦多からず、爲めに其味を失ふを以て羊を食するもの少なく、從つて賣買は盛んでない。されば此の間は毎市十疋位の集合あるに過ぎない。然れども八、九、十月の頃に至りて金風一度吹き來る時は、羊は肥えて肉を增し脂も亦多くなるを以て、人は喜んで之を食する。羊毛、羊皮も此季節に及べば價貴きを以て市場は漸く賑ひ、毎市に三十疋乃至五十疋位の集合を見るに至る。十月三

日の大會にはその集合數最も多く、數百疋乃至一千疋内外の賣買を見、衙門に上税する爲め屆け出つる羊の頭數を見るに、春季冬季に於ては全くなく、秋に及んで十月を除き二百頭の賣買あるは二箇月、百五十頭位なるは三箇月とし、四、五十頭乃至百頭なるは二、三箇月なりと云ふ。

甘肅の馬市

蘭州路を甘肅に入りたる五村は戸數三百に足らざる小村落に過ぎざれども、涇水の邊に介在し附近稍肥沃にして、土地廣大ならざるも牧草よく山野に繁茂し、牧畜の好適地である。其位置は涇州より三十支里白水鎮に至る四十支里に在り、元來此附近は山岳嶮峻ならず、山上は一面の高原をなし到る處開墾せられ、人力の及ぶ所盡く耕耘され殆んど餘すところなく、一面の高原は牛、馬又は騾子等によりて耕され、然かも涇水には舟運の便なく、交通は專ら牲口によりて營まるゝを以て、牲口の需用夥しく、これ馬會卽ち馬市の開かるゝ所以である。會の開かるゝは十日に一、四、七の三回と定められ、卽ち都合一箇月に九回となる。一年を通じて開かれ、春夏秋冬により會の牲口數に多少あるも、決して休止せらるゝことなく、會は王村鎮東口の特に設けられたる大廣場に於て開かるゝものである。其集る牲口は夏期に於て牛、馬、騾子、驢馬等を合計して三百頭内外である。其の中牛は最も多く馬、騾子、驢子等これに次ぐ。是等の牲口は王村鎮を中心とせる十支里乃至十五支里以内の地より來集するものにして、之を出すものには農民あり、運送店あり、又馬店あり、普通の商人あり、一個人にて多數の牲口を率ひ來る者は稀にして、大抵一人五頭乃至七、八頭に過ぎない。その賣買に當りては仲立人の手を經るを常とするを以て、賣買相互間に於て喧擾を極むる等のことなく、極めて平穩に行はれる。

附　關東州の市場

支那に於ける市場に就いては大體の說明をしたから、更にわが關東廳管内の市場に關して考察して見たい。尤も定例日に開市さるゝ地方市場の狀況は、支那各地及び滿洲地方のものと何等異なつたところはないから、玆には主として市街地に於ける魚菜市場のことを記述して見やう。

關東州には大連、旅順、金州、普蘭店、及び貔子窩の五地に魚菜市場の設けあり、現在大連には五箇所、其の他は一箇所又は二箇所である。旅順、大連、及び金州の各市場は、從來何れも官に於て其設備を爲し、場内の店舗を希望者に貸下げ營業せしむる制度であつたが、大連は大正十五年一月より、旅順は昭和二年十二月より、何れも市に移管して經營せしむることゝなつたのである。大連市内の魚菜市場は、關東廳より大連市に移管の際、信濃町市場（大連市の代表的市場）に果實及び蔬菜糶市場の施設を爲すべき條件あり、依つて大連市には大連市卸賣市場を開設することゝなり、昭和三年二月二十九日關東廳の認可を

受け六月より實施することゝなつたのである。州外滿鐵附屬地に於ける市場は、安東一箇所を除くの外皆私設である。

關東廳管内市場の場内取引は、勸賈場式にて特記すべきものなきも、場外取引は稍特色あるものと云ふことが出來る。卽ち市場屋外の平場に、毎早朝、蔬菜、果實、魚介、穀物、馬糧、燃料等を運び來り、市場に若干の入場料を納め、商品を陳列して買手の來るを待ち隨意賣買を爲すものである。

關東州及び州外滿鐵附屬地市場表（昭和二年中）

市場名	經營區分	所在地	開設年月	敷地坪數	建物坪數 店舗	建物坪數 倉庫	建物坪數 計	出店數	賣上金額 魚類	賣上金額 鳥獸肉	賣上金額 蔬菜	賣上金額 其他	賣上金額 計	備考
旅順市場	公設	旅順市朝日町	昭和二一一	八三	四元	—	四元	二四	八五、二九〇円	五、四六円	三六、二〇五円	二四、三〇〇円	一五一、三三三円	昭和二年十二月二十七日旅順市ニ移管ス
關東州水産會旅順魚市場	私設	〃	二、二〇	七五	三三	—	三三	一	二五七、三〇〇	—	—		一五七、三〇〇	賣揚金額中ニ旅順市場ノ賣揚額ノ大部分ヲ含ム
信濃町市場	市營	信濃町一四	大一四、一五正	四、〇五三	一、〇七三	二六三	一、三三七	一〇七	一、一八五、六五八	一七五、二六二	八六三、六九三	六六九、三六九	二、八九三、九八三	
山縣通同	同	山縣通一四八		二、六一八	五四七	三三	五八一	四〇	二四、六一五	二八、六三〇	八一、五〇〇	二九九、五五五	五二四、三〇〇	
小省子同	同	西崗街二五		一、四六〇	六一三	—	六一三	四七	四九、四二二	七四、一七三	一〇一、五四五	二四、五九九	二〇九、八三八	
沙河口同	同	大正通一		一、九三三	二四八	七九	三二七	二五	九三、一〇〇	五一、七五〇	一四二、四五〇	一四〇、〇一〇	四二七、三三〇	
千代田町同	同	千代田町三三	昭和二六、一一	一、四九六	四二四	—	四二四	一六	八、三一〇	一四、七四一	九、九六八	一七、九一一	五〇、六〇〇	
關東州水産會大連魚市場	私營	信濃町一四〇	二、一〇	—	二八四	—	二八四	一	二、〇〇〇、六四七	—	—	—	二、〇九七、九八五	店舗ハ滿洲水産株式會社ノ所有物ナリ
普蘭店市場	私設	平和街	大七、九正	三一七	二七五	—	二七五	三五	一三、四四二	九、一三〇	九、一〇八	一四、三三七	四六、〇一七	
金州市場	公設	金州西街	明四三、八治	一、一七〇	一四八	三	一六九	一六	三二、九九五	五、〇四四	一七、三一五	一六五、〇九五	二一〇、四一九	
貔子窩會市場	公議會立	西街	明四二、一治	一八〇	一七	—	一七	一七	二五、六〇〇	一六、〇一〇	六、二〇〇	三、〇〇〇	五〇、八〇〇	
家畜市場	官營	魏子窩宋家屯	昭和二五、一一	一、三〇〇	一	—	一	—	—	—	—	—		
大石橋南臺家畜市場	私營	松島町	大正一四一〇、二六	二、七〇〇	二四	一三〇	一五四	—	—	—	—	—	三三、六三二	家畜出頭數一一、六八四
營口市場	同	營口	明四〇、七治	二七〇	一五二	七五	二二七	九	八、九〇五	四、〇八六	一九、二七八	七九、九八三	一二二、二三二	
滿洲市場株式會社	同	大江島町六	大正六一〇、一八	二、八五六	八三三	四〇	八七三	四〇	一九〇、三七四	三四、六四一	五六、二三四	一三九、一二三	四〇一、三七二	
安東縣魚菜市場	公設	四番通二九、二	明四〇、九治	一、四五四	三〇四	—	三〇四	三七	五七、五七一	五九、九三〇	七四、二一三	三七、〇五四	三二八、七六八	
伊佐奈商會支店	私設	安東縣一、八	明四三、四治	一、九六〇	二八九	四二九	七一八	二	八七、二三〇	—	—	—	八七、二三〇	

撫順中央市場	同	東三條通	大正一五、九	一、一二六	三三〇	四一	三九一	二三	一八九、四五五	四〇、一七八	五八、三九二	九〇、四四九	三七八、四七四																						
鐵嶺魚菜市場	同	宮島町	昭和二、六	四〇〇	一七六	—	一七六	五	六、二五二	五、五三〇	五、四〇三	四、六三〇	二、八一五																						
開原魚菜市場	同	開原附屬地五、一	大正七、二三	三、五八七	五五五	五一	六〇六	五三	六、八一六	三〇、六六六	一七、一〇〇	二、六〇〇	五七、二六二																						
同	同	同五、二	九、一二	三、〇四九	五〇	—	五〇	—	—	—	—	—	—																						
同	同	同九、八	五、八	一、〇七一	二八	—	二八	—	—	—	—	三二、六七〇	三二、六七〇																						
長春市場株式會社	同	日本橋通二九	六、八	一、四五六	三二四	四九	三七三	二六	一四二、三七五	五二、三三六	六三、七五〇	七五、七九六	三三四、二五七																						
長春牛馬市場	同	長春住吉町七	八、六四	二、四〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—																						
大東溝魚市場	同	大東溝	三、三	三〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—																						

大連市の魚菜市場

關東州市街地及び州外滿鐵附屬地の市場狀況は右の通りであるが、尙ほ大連市に於ける魚菜市場取引の概要を左に示して置く。

一、卸賣市場は蔬菜及び果實の卸賣を爲す市場にして、市に於て設備を爲し、糶人及び事務員を置きて、糶行爲及び業務の監督を爲す、市場には卸賣人及び仲買人を許可し、糶卸賣人は生產者又は荷主より賣却の委託を受け、市場に於て賣却するものにして、手數料として賣上高の一割を收得す。仲買人は糶賣買に依りて買受け、更に他に販賣するものとす。右賣買行爲は市吏員たる糶人の仲介に依りて行はれ、市は之を監督するが故に公正なる相場を生じ需給調節の便を圖り得るものとす。

二、信濃町外四箇所の小賣市場昭和二年の賣上高は左表の通りなるが、此內蔬菜の半數は內地、臺灣等より輸入、半數は地方產、鮮魚の約半數は內地より輸入、半數は附近海產、鳥獸肉及び生鳥は滿蒙各地產、食料雜貨は大部分內地より輸入、一部分朝鮮又は滿洲產のものなるも、之を日本、臺灣其の他各地に分別したる調査材料なし。

昭和二年五市場賣上高

蔬菜果實	一、一九九、一一七、四〇（円）
鮮魚	一、四五一、〇一五、四五
鳥獸肉	三四四、四五六、八〇
食料雜貨	六五三、一三二、六〇
生鳥	一五六、二二三、六〇
外部	三四二、〇九九、四五
外篇支那の市	

外部は家具、呉服、菓子、生花、玩具、其他の物品販賣店にして一々區分し難し。

三、小賣市場店數、倉庫數

小賣市場別

營業種別		信濃町	山縣通	小崗子	沙河口	千代田町	計
內部販賣店	日用食料品	一五	一五	一一	二	一	四四
	鳥獸肉	一〇	五	一二	三	六	三六
	蔬菜果實	二三	一〇	一七	六	七（其他五）	六三（其他五）
	魚類	三〇	一〇	一一	四	五	六〇
外部販賣店	雜貨	三九	—	—	—	八	四七
生鳥販賣店	生鳥	一二	—	—	—	—	一二
倉庫	貨物室	二八	二四	—	二九	—	八一
	氷室	一	—	—	—	—	一
合計		一五八	六四	五一	四四	三二	三四九

追記「關東州管內市場」に關する資料は、全部關東廳文書課中村廣喜氏の厚意により寄贈を受けたものである。

これを要するに、支那及び關東州に於ては、今尙ほ地方市場の存在するもの多く市街地に於ても常設店舗の外に、各種市場の取引が盛んであるが、その多くは毎日市場にして、朝鮮の如き定例日に開市さるゝ日限市の取引は少いのである。殊に支那の地方市場は、その地方地方に於ける特產品の出廻期には頗る殷賑を極め、到底朝鮮の地方市場などとは比較出來ない盛況である。これは市場の勢力範圍が廣く、且つ物產の豐富であるにも因るが、支那の地方市場は大體に於て特產品集散市場の觀がある。從つて多くは季節的に繁閑あり、朝鮮の如き日常必需品の需給を爲す市場は菜市と稱するものに相當し、これ等も殆んど毎日市場である。

朝鮮の市場經濟（終）

昭和四年三月十五日印刷
昭和四年三月二十日發行

朝鮮總督府

京城府端溪町三丁目六二

印刷所　朝鮮印刷株式會社

終